読者に

書物の出だしの数行はことのほか重要である。どれほど気を配ってもやり過ぎということはあるまい。プロの批評家や読者が恥ずかしげもなく白状するところでは、出だしの三行でひとつの作品を判断するとのこと。出だしが気に入らなければ読むのをやめ、ほっとして次の本に取りかかるのだ。

そんな手ごわい岬を読者は今まさに通過したわけである。いまや読者の存在に気づかぬふりもできない以上、あなたの勇気と冒険心を称賛させていただきたい。突飛な船旗で当たりをつけたはいいが、その下にどんな積み荷があるやも知らぬまま、あな

たは未知の書物を読もうとしているのだ。大胆さなどもはや時代遅れとお考えだったろうが、これぞまさに大胆さというものだ。

確かに――こう言ったとてあなたの手柄にけちをつけることにはまったくならないが――今回冒した危険はたいしたものではなさそうだ。この書物はさほどの分量ではないし、これまでに少しでもウリポの作品に親しんでいたなら、表紙の名前に見覚えがあるかもしれない。

だが、それもまたあなたには危険となりうるだろう。どんな探検に引きずり込まれることになるか分かったものじゃない。それでも、あなたにいくつか確約をして誤解が生じないようにしておきたい。

あなたはたぶんこうお考えだろう。七千年来〔文字が発明されて以来〕生み出されてきた本（数枚の怪文書から浩瀚な百科事典までの、ありとあらゆる種類の本）がどれほど莫大な数にのぼろうと（概算値くらいはきっと何らかの専門書に載っているはず）、こうして今なお続く生産に私個人がまったく関わってこなかったというだけで、自らが特別だと主張するのは、なんにせよ馬鹿げていると。要するに、あなたに言わせれば、本

を一冊も書いていないということだけでどんな人間なのかが分かるはずはないし、当人もそんなことは気にしてないはずなのだ。これを否定する者はいないだろう。

しかしながら、準拠サンプルを狭めて、多様な人類全体ではなくより限定された集団を考察するならば――たとえば、友人知人の輪の中を我々は各々動きまわって、その意見を気にしているわけだが――、事態は別の見え方をする。書くこと、とりわけ本を出版することが単なる仕事ではなく価値のある行為（ときに長きにわたる価値観の瓦解を唯一生き延びた行為）でもある環境においては、競争から降りれば大いに目立つことになるのだ。そして、この特異な状況は検討に値する。怒らせるにせよ、興奮させるにせよ、喜ばせるにせよ、はたまた心配させるにせよ、特異性は周囲の人たちに無視しえない疑問をかき立てるからだ。

これに答える方法はいくつかあるのだが、私はそれらを用いるつもりはまったくない。まったく網羅的ではないが、以下がその方法の一覧である。

・書き言葉より話し言葉の長所を言い立てる、

・言語をくさし、言葉の信用を傷つけ、〈真の意思疎通の一切不可能なる〉を嘆く、

・語りえぬものの中に身を隠し、沈黙を至高の価値として賞讃する、
・現実との格闘としての人生を、書くことより優先すべきものであると讃える、
・〈行動より望ましき不干渉〉の主題、あるいは〈どのみち破滅して死に絶える世界で事を始める虚しさ〉の主題を大げさに言い立てる。

私が自分の本を一冊も書かなかったのは、もちろん文学との絶縁を夢見ているからではない。私は書けないことをもって達成としたわけではないし、できないことをもって生産とみなしたわけでもないのだ。私は何も覆したいとは思っていない。それどころか、書物の世界の掟をすべて尊重しようと思っている。

たとえば、作家たる者は皆、作家ならざる者はなおさら、作品ならざる物を出版すべからずという不文律がある。さもなくば、出版社はただでさえ大量の原稿を送りつけられ処置に困っているのに、死蔵原稿の津波に呑みこまれてしまうだろう。おそらくは同じ理由から一般に次のことも認められよう。死んで（いて、多少とも名が知れて）いなければ、いつの日か未発表原稿を発表する権利はないということだ。書き物に手を染めた人間は、メモ書きやら下書きやら省察やらの山を、生涯にわたってため

込んでしまうものだが、ようやく形をなしたに過ぎないそれらの素材は来たるべき作品に組み込まれる日を待ち続けているのである。

どんな方法によるにせよ、この二つの規則に背きたいとはまったく思っていない。だからといって、何らかの理論を構築し、厳密な決定論の用語で自分が書かない理由を説明しようというわけでもない。

うまくいけば、本書はさまざまな（もちろんソクラテスが言う意味での）ダイモーンたち〔間違いを犯さないように警告してくる「声」〕による競争の所産ということになるだろう。懐疑とアイロニーのダイモーンは、最後の最後に、真面目と信念のダイモーンに勝ちを譲るだろう。だが、さしあたり私はこの競争の見物人に過ぎず、どの走者を応援すべきかさえ分からない。

著者